

2016年6月27日

札幌チャレラジオ通信 第25回

飯村：三角山放送局をお聞きの皆さん、こんにちは。札幌チャレラジオ通信です。私は、パーソナリティーのNPO法人札幌チャレンジの飯村です。よろしくお願いいたします。
札幌チャレラジオ通信は、自立を目指す障害のある人がITで「マザル、ハタラク、拓き合う。」社会を作りたいとの思いで活動しているNPO法人札幌チャレンジが、毎週月曜日のこの時間に札幌チャレンジの活動内容をお伝えする番組です。2016年1年間放送します。
今日と来週は、講習グループの私、飯村とそして同じく講習グループの高橋良雄がお送りします。良雄さん、よろしくお願いいたします。

高橋(良)：よろしくお願いいたします。

飯村：6月も27日ということですね、1年間も半分すぎちゃいました。どう、良雄さん。

高橋(良)：あっという間ですね。

飯村：あっという間でけれども、このラジオのことを考えると、まだ半分かという感じがすけれどもね。

高橋(良)：半分残ってますね。

飯村：あと半分ね、また充実させた番組をお送りしたいと思っておりますが、今日のゲストは札幌チャレンジとは、古いお付き合いのご夫婦。高橋幸雄さん、千鶴子さんのご夫妻です。幸雄さん、千鶴子さん、どうも今日はありがとうございます。

高橋(幸)：よろしくお願いいたします。

高橋(千)：よろしくお願いいたします。

飯村：高橋幸雄さん、千鶴子さんということですね。そして今日の私の片割れが高橋良雄ということで、私以外全員が高橋ということで、だからどうだということでもないんですけども仲良くやっていきたいと思えます。まず、高橋さんご夫妻はお2人とも視覚障害のご夫婦ということで、そして札幌チャレンジとは本当に長いお付き合いなんですね。そこでまずお2人に自己紹介をお願いしたいと思うんですけども、まず、幸雄さんからよろしいですか。

高橋(幸)：私、高橋幸雄と申します。札幌チャレとは長いお付き合いで、15、6年経っており

ます。生まれは 1937 年、ちょうど 79 歳になります。

飯村：では、よろしくお願いします。

高橋(幸)：よろしくお願いします。

飯村：それでは、奥様の千鶴子さん、お願いします。

高橋(千)：私も主人と一緒に札幌チャレに行っている、高橋千鶴子です。

私は昭和 15 年の 1 月 10 日生まれで 76 歳です。

飯村：私も札幌チャレンジに入ったころにはお 2 人はすでにいらして、何度かお目にかかって、いつもお 2 人でいらして仲の良いご夫婦だなというふうになんか思っていました。そうすると結婚して何年になるんでしょうか。

高橋(千)：40…、

高橋(幸)：46、7 年。

高橋(千)：そうですね。

飯村：ちょっとした馴初めなんかよろしいでしょうか。

高橋(千)：私方は、結婚したのは、盲学校の担任の先生、幸雄さんは幸雄さんの担任の先生。そして、お互いに私の先生は、高橋幸雄というとっても性格のいい男で針もすぐきわどい所にする上手な人だから付き合ってみないかって言われました。

飯村：なるほど。

高橋(千)：それで、幸雄さんも言われたんでしょ、向こうの先生に。

高橋(幸)：言われましたね。

高橋(千)：それで 2 人が教室でお互いに会って、私方、特殊クラスところで幸雄さんは点字を一生懸命習ってたんですけれども、私はまだ見えてたので普通に墨字でやってたんですよ。そこでも幸雄さんのこと知ってたので、臨床室で会った時なんかは吹き出してしまったんだけど。それで先生の紹介で 2 人が付き合うようになったんです。でもこの人は卒業とともに栗山の整形外科に勤めて離れて行ってしまったんですよ。私のところから。でも私は点字とかしてなかったから、見えてたのでね。幸雄さんに墨字でやっても見えないし。一生懸命、点字で幸雄さんのところへ手紙書いて、幸雄さんは私が点字を読めないからテープで、いろんなことを吹き込んできて、そんな付き合いをしました。

飯村：お2人ともこれは付き合いは続けるべきだと。

高橋(千)：そうです。そうです。

飯村：努力されてるんですね。

高橋(千)：そうです。

飯村：なるほどね。

高橋(幸)：盲学校を卒業して1年経ってからすぐ結婚したんですね。

42年に卒業して43年に結婚したんです。だから割りと早いのかなと。

飯村：学校と先生が、取り持つ縁ですね。

高橋(千)：そうです。そうです。

飯村：まずそもそも、パソコンと札幌チャレンジドとの出会いというところをもう一度教えていただきたいんですけども。もうかなり昔ですよ。

高橋(幸)：そうですね。

飯村：何がきっかけでしたでしょうかね。

高橋(幸)：二十四軒というところで、一番先のパソコンの講習があったんですね。それがチャレンジドだったんですよ。そもそもが一番先に確かそうだったんですよ。

飯村：そうですね。札幌チャレンジドのその講習がきっかけで活動に。

高橋(幸)：その時に私と千鶴子がやってみようかということで、やったんですがね。

飯村：パソコンそのものはどうでした。パソコンというものがあるんだというのはそれはもう。

高橋(幸)：難しいということは知ってましたけれども。

飯村：難しそうだけれども、便利そう。

高橋(幸)：やれば何とかできるという。

飯村：何というか興味があってということですか。

高橋(千)：そうですね。興味はあったね。それで幸雄さんは普通の点字を入れるんじゃなくて一般の人がやれるようなやり方でしたんでしょ。普通は六点字でもって入れるんだけど幸雄さんの場合は、

高橋(幸)：墨字をもって習った。

高橋(千)：普通の一般の人と一緒に交流できるように習ったんですよね。私も同じだから。

飯村：お2人で受講なすって、習得度合はどちらの方が。

高橋(千)：幸雄さんです。

高橋(幸)：私は、普通に入力してたから。この人はやっぱり見えてるだけにちょっとそこにあったんじゃないんですか。

飯村：なるほどね。

高橋(幸)：私、まるっきりこれしかないと思ってるから。チャンスは今だと思ってやってみましたね。

飯村：それでそのチャンスをもものにされて。チャンスをもににするの得意そうですね。結婚といい、パソコンといいね。それで今は大体どんなことでパソコンは使ってます。

高橋(幸)：今はメールとか、あとインターネットでもって、話題を聴いてみたりいろいろとやってもらっております。

飯村：役に立ってますか。

高橋(幸)：はい、立ってます。大いに。

飯村：よろしいですね。なんとなくいろいろお話し伺ってもね、それからいつも2人で楽しそうにやってらっしゃる生活をですね、

高橋(幸)：趣味が2人とも同じですからね。

飯村：なんかすごく楽しそうなんですよ。それで今日は、パソコンだけではなくお2人が普段どんなふう楽しく生活されているのか。それから、いろんなボランティアの方との関わりがあるんですよね。その辺のこともいろいろ聞かせていただけたらと思います。まずパソコンについては今、こういった形で札幌チャレンジドとの関わりを続けていただけてるのでしょうか。

高橋(幸)：そうですね毎週、初めのうちは2週間に1回やってたんですけど、今は少し慣れたとみて、1ヶ月1回にやっていますけどね。

岩泉先生という方から、チャレンジドの岩泉先生から習っております。

飯村：岩泉さんですね。この番組にも出ていただきました。今日も実は見えてますけどね。それでメールをやって、そしてそんな中で他のボランティアさんもいろいろと関わりを持ってらして、今日もヘルパーさんお2人のお供でこちらにお見えになっているんですけれども、その方もボランティアさんなわけですよね。

高橋(幸)：あなたから言ってもいいですよ。

高橋(千)：あの方は、本当のボランティアさんで、

飯村：そうですね。

高橋(千)：別にお金いくらかかっていうんじゃなく、1時間何ぼっていうんじゃなくて、本当のボランティアさんで来てもらってます。

飯村：もうお付き合いは長いんですよ。

高橋(千)：長いです、長いです。全然長いです。

飯村：すごく親しそうに先ほどもお話されていましたがけれども、たぶん、良い関係なんだなと思って拝見しておりました。

それですね、ここでリクエストをいただいているんです。曲をね。それでリクエスト曲を頂戴いただけますでしょうか。今日は何を。

高橋(幸)：北島三郎の「涙の花舞台」です。

飯村：演歌ですね。

高橋(幸)：演歌です。最近の得意の聴いてもよし、歌っても良しってのが、すごくあるんですね。

飯村：この辺もバリバリやってらっしゃるってことね。それでは、高橋幸雄さんのリクエスト曲で北島三郎の「涙の花舞台」。よろしく申し上げます。

飯村：幸雄さん、北島 三郎なんか聞いちゃうと、ここで一杯とかそんな気分なのではないですか。

高橋（幸）：そうですね。

飯村：お酒はあれですか。毎晩やってらっしゃるの。

高橋（幸）：大体。

飯村：大体ね。

高橋（幸）：そうですね。

飯村：奥様のお料理で。

高橋（幸）：ええ。

飯村：ということですね。奥様はあれですね。いつも普段の食事は奥様が料理されて。

高橋（千）：そうです。はい。

飯村：料理はあれですか、結婚以前から自分でやってらっしゃるのですね。

高橋（千）：そうですね。はい。

飯村：今はね、結構ね、だいぶ見えなくなってらっしゃるということですよ。

高橋（千）：はい。

飯村：どうですか、料理はやはりある程度大体問題なく。

高橋（千）：大体、感、昔やってたから感でもって。

ただ胡椒とか南蛮とかを混ぜなきゃならないときにフライパンの中でパッパと落としても見えないじゃないですか。

飯村：はいはい。

高橋（千）：それで手をきれいに洗ってその上に大体感で入れて、あ、このぐらいなら丁度良いなっていう感じ。

高橋（良）：ほおー。

高橋（千）：あとはお醤油も白い入れ物の中に醤油を垂らして。

飯村：はい。

高橋（千）：中心がちょっと見えるから、白のなかに黒があれば中心ちょっと見えるのですよね。

飯村：ええ。

高橋（千）：このくらいだったらいいかなあっていう感じで。

飯村：なるほどね。

高橋（千）：料理を作ってます。

飯村：なんかね、さまざまなのですね。

高橋（幸）：作るの上手ですよ。ほんとおいしいですよ。やはり。自分は家内意外の物は食べられないですね。

飯村：言ってくれますねえ。

そうですね、普段ですね、お二人ともねいろいろ趣味とかね、いろいろ幅広くやってるといふふうにお伺いしてますけれども、それぞれいかがですかね。幸雄さんは大体どんなことをやってらっしゃってるのですか。

高橋（幸）：土曜日はですね。

飯村：はい。

高橋（幸） 毎週土曜日は走っています。

飯村：どのくらい走ってるのですか。

高橋（幸）：10km から 15、6km 走ってます。

飯村：すごいなあ。

高橋（幸）：それ終わって、土曜日の夕方にはボーリングあるのですけれども。

飯村：あれ。

高橋（幸）：ボーリングをやっています。

飯村：ずいぶんですね。

高橋（良）：積極的ですね。

高橋（幸）：火曜日になったら水泳ですね。

飯村：あー。

高橋（幸）：水泳に行って 2 時間くらい泳いで来ます。

飯村：あーすごいねえ。走るときには誰か伴走の方がいらして。

高橋（幸）：そうです。伴走者もおりまして、ロープをつないで走ってくれます。

飯村：その方はやはりボランティアですか。

高橋（幸）：ボランティアです。

高橋（千）：ボランティアっていうか、一般の人なのですよ。

飯村：うん。

高橋（千）：別にボランティアでないのですけど。

飯村：ええ。

高橋（千）：普通の家庭の旦那さんとか。

飯村：はいはい。

高橋（千）：奥さんとかでもって。

飯村：うんうん。

高橋（千）：来てくれているのですよね。土曜日の忙しいときに。

飯村：はい。

高橋（千）：そして私がたのために真駒内から

飯村：うんうん。

高橋（千）：車を出して真駒内競技場まで連れて行ってくれるのです。

そこでおろしてあと走るとき全部、誰には誰誰、高橋さんには誰誰ってつけてくれて。

飯村：うーん。

高橋（千）：それで走って、帰りも真駒内の地下鉄まで送ってくれるのですよ。

飯村：それはもう素敵ですね。

高橋（千）：普通の一般の人なのですよね。

飯村：とくにボランティアということではなくって、自然にそういう関係が出来上がってる。

高橋（千）：はい。そうです。

飯村：これいいねえ。良雄さんね。

高橋（良）：いいですね。そういう信頼関係があるってことはいいですよええ。

飯村：こういう信頼感っていうのは私自身にあるかどうかっていうのはこれちょっと気になるところですけども。

高橋（良）：ちょっと我々には。

飯村：はいはい。それで奥様の方はまたね、奥様の方で幅広く手掛けてらっしゃると。

高橋（千）：ほとんどうちと同じように、幸雄さんと同じような趣味で全部趣味で。

飯村：趣味も一緒。

高橋（千）：うんうんうん。マラソンして。

飯村：うーん。

高橋（千）：帰ってきて急いでお食事食べてそれからポーリングです。

飯村：うーん。

高橋（千）：ポーリングに行って火曜日は第2火曜日はカラオケの日なのですよね。

飯村：はいはいはいはい。

高橋（千）：クラブだから。皆20人ちかく集まってきます。

飯村：楽しいですね。

高橋（千）：大体12時くらいから4時まで歌ってます。

飯村：うーん。なんだか楽しい毎日ではないですか。

高橋（千）：楽しいです。

高橋（幸）：そうです。

高橋（良）：多趣味な方ですね。

高橋（幸）：1 週間なんてあっというまです。

飯村：あっというまですよ。

高橋（幸）：そういえばこちらの紙ふうせん。ありますね。

高橋（千）：私。

飯村：そうそうそうそう、そのお話ね。

高橋（千）：私はその他に紙ふうせんっていう視覚障害者の人たちが途中失明になったときに、いったい私はなにができるのだろう。

飯村：うーん。

高橋（千）：これもできない、あれもできない、どうしようっていうような方たちがね。

飯村：うーん。

高橋（千）：皆集まってきます。紙ふうせんに。19 丁目のセンターで第 4 水曜日の日にやっています。

飯村：はい。

高橋（千）：それでそういう方が皆集まってきて、お互いに爪が見えなくなったのだけど、爪切りできなくなったのだけど、どうしたらいいだろうとか。

飯村：うーん。

高橋（千）：いろいろな問題を持ってきて最初に分かってる人たちがそれに答えます。

飯村：うん。

高橋（千）：あと男の人はいろいろな問題を持ってきて。

飯村：うん。

高橋（千）：こういうこともあるのだよ。世の中のいろいろな見えない、少しでも見える人は新聞記事を聞いてきていろいろなことを皆に教えてくれます。

飯村：はい。

高橋（千）：紙ふうせんは、年にいろいろな催し物があって、クリスマス、お雛さま、そして、海・海水浴、あとは普通一般のいろいろなところに遊びに行ったり何かする会があるのです。

飯村：うーん。

高橋（千）：毎月大体 50 人位来ます。

飯村：すごいねえ。

高橋（千）：大体 50 人。

飯村：皆さんがそうって集まってですね。

高橋（千）：はい。

飯村：日常生活の小さなことからあるていどのことまでいろいろなこととお話しされるわけですね。

高橋（千）：あー、そうです。

飯村：そうやっていわばね日常生活というのをどうやって楽しく暮らそうかと。

高橋（千）：そうですね。

飯村：うん。大事なことですよね。

高橋（幸）：うーん。

高橋（千）：そうですね。ほとんどだからそのときには皆、目の痛み。

飯村：うん。

高橋（千）：目の苦しみを忘れて皆と笑顔で語ってます。

飯村：うーん。そういったなかではいろいろなボランティアさんとかもいらっしゃるのかしら。

高橋（千）：晴眼者の人もなかに入ってくれています。

飯村：あー。

高橋（千）：だから今のさっきの佐々木さんも入って、あとまだたくさんいてお手伝いはたくさんしてくれてます。

飯村：うーん。

高橋（千）：皆のお手伝いはね。

高橋（幸）：うちの家内がその会長をやってるものですから。

飯村：会長、会長さんなのですね。

高橋（幸）：紙ふうせんのね。

高橋（千）：だからね皆ね、そうやってほんとうにありがたいですよ。

飯村：うん。

高橋（千）：見える人がね、見えない人を助ける。

飯村：うん。

高橋（千）：その助けられる私方本当に感謝です。なにもできないですもん。

飯村：いえいえ。あのね、皆さんねそれがね、ボランティアさんそれが楽しくてその場いらしてるわけでしょ。

高橋（幸）：そうですね。

高橋（千）：そうですね。

飯村：そこのところはお互いさま。一緒にねいい時間が過ごせればそういう気持ちは同じだと思いますよ。

高橋（千）：そうですね。

飯村：とくにね、途中から視力を失った方ですね。なかなか最初は大変ですものね。

高橋（千）：そうです。

飯村：失った苦しみ、それからなかなかやはりこれからどうしようすごく辛いものがあると思います。そんななかでねそんな会があって励ましてくれてくれるととても心強いと思いますよね。

高橋（良）：ええ。

高橋（千）：うちなんて二人とも見えないのでね。

飯村：はい。

高橋（千寿）：家庭の中でも大変なのですよ。

お食事、お茶碗によそって、はいってあげても逆の方から手を出したり、私と交差しちゃうのですよね。上手に取れないっていうか。なんでもそうなのだけどね。

だからそういうのすごく辛いけども大変けどもでも、やはり楽しいこともたくさんあるから。

飯村：お話を聞くとねそういった大変さを差し引いてもね。

高橋（千）：そうそうそう。

飯村：楽しさにあふれてるそんな生活が、目に浮かびますよ。

はい。それではですね、そろそろですね、ちょっとおしまいの時間なのですからけれども本当にお話をお伺いしてですね、楽しくいつもやってるのだなあという、そういう光景が目にかかびますね。良雄さんね。

高橋（良）：本当そうですね。二人は仲がよろしいというのがすごいうらやましい。

飯村：なにがうらやましいの。

高橋（良）：ぼくは独り身なものですから。

飯村：あ、そっか、そういうことか。分かってて聞いたのですけどね。

今日もねお二人のほかにはですね番組には出てませんけれども、パソコンボランティアの方と、ここまでね一緒に来てくださったボランティアの方と、とってもね普段からいい関係作ってらっしゃるなっていう気がするのです。ボランティアの方もですね、お二人とお付き合いするのを楽しんでいらっしゃるような、そんな印象を受けました。

高橋（幸）：だから私ども今スマホになってから大変ですけどもスマホにもいいのができたということを聞きましたからね。

飯村：はい。

高橋（幸）：障害者でもぜんぜん見えなくてもできるということを実感して今一生懸命勉強しております。

飯村：はい。私たちも勉強してますのでまた皆さんと一緒にねそういったものを楽しめたらいいかなというふうに思ってます。

高橋（千）：そうだね。教えてもらえればね。

飯村：はい。はい。それではですね、今日はここで終わります。はい、また来週お会いいたしましょう。どうもありがとうございました。

高橋（千）（幸）（良）：どうもありがとうございました。